

忘れ得ぬ出会い・言葉・出来事

私の原点

私の初任地は、山々に囲まれた小さな小学校でした。ニコニコしたふくよかなお顔の校長先生を含めて、九名の教職員が私を迎えてくれました。さっそく職員会議、私の下宿先はどこがよいかその議題だったので、先生方の温かさに感動し、緊張がちよっぴり減りました。学校に近い田畑の中の大きなワラ屋根の農家が、全員一致で下宿先に決まりました。家族は三人で、私には奥座敷が与えられました。朝夕の心のこもった手料理と囲炉裏を囲んでの語り、そして宿直の合間には先生方が来てくれました。学校の昼休みには、子供たちと裏山にキノコやワラビ採りにも行きました。

この小学校は、統計教育の研究指定校でした。研究主任の先生は「養護教諭も統計の勉強は必要。データをグラフ化することで資料が生きてくる。見えにくかったものが見えてわかりやすくなる。」と話されました。私は自分にできる統計は何かを考え、大きな模造紙に保健室利用状況の棒グラフと円グラフを描きました。これが私の統計グラフとの出会いでした。健康診断結果を始めとして、保健室利用状況、災害給付状況、歯磨き状況、各種の調査結果などのグラフ化は、学校全体や子供一人一人の健康の実態の把握にとっても役立ちました。この小学校で学んだ「実態をグラフ化し、そこから見えてくる問題点を明確にし、実施可能な対策を立て、実施後の反省点と課題を次に生かすこと」、これが私の執務の原点であり、以後今までの三十余年の執務の中に常に統計グラフがありました。その成果の一つとして、給食後の歯磨き状況のグラフ化により、ほとんどの学級が歯磨き実施率百パーセントになったことが印象深く心に残っています。

また、初任の頃は不登校もいじめも引きこもりもなく、元気な子供たちとの毎日が夢のようにでした。近年はコミュニケーションが苦手で、集団不応答を起こして不登校になったり、保健室登校や支援機関を利用したりする子供たちが増加しています。学校にはスクールカウンセラーや心の相談員が配置されて、対応に当たっています。その中で養護教諭の役割は大きいと思います。毎日の学校生活で子供たちの身近にいるのは養護教諭です。私も長い養護教諭生活に区切りをつける年齢になりましたが、その中で、教育は人を育てることであり、人は真つ直ぐにも曲がつたりもして育つものと教えられました。できるだけ真つ直ぐに育てることが養護教諭の行う心身の健康教育だと思います。大切なのは、その子供たちの健康状態、生育歴、家庭環境、友人関係、部活動等を熟知するよう常にアンテナを高くし、子供の表情から変化を察知し見逃さないことだと思います。

あるとき、小学校で学級崩壊の中心的存在だった生徒が中学校に入学してきました。彼は授業にも集中せず、毎日保健室に顔を出しては小学校時の悪さを得意になって語っていました。しかし、中学三年になったときには、下級生の指導で思案している私に、「先生も困っているのかよ、言ってみな。」先輩の俺が話してやろうか、俺もそうだったからな。」などと、落ち着いて話をするまでになりました。その後、彼は文化祭のバンド演奏に向けての練習に夢中になるようになり、保健室にも時々しか顔を見せなくなりました。

児童生徒の成長を感じることができるとは、学校で生活する教職員の醍醐味であると思います。生徒と温かい触れ合いができたのは、初任での体験があったからです。あのとき人々の温かさに触れたことも私の原点でした。

「その時歴史が動いた」というように、転機となったその時は、後になって気づくのが一般的なようです。思えば、私を教師の道に導いた最初の一步は、情熱と使命感にあふれた、あのA先生との出会いだったのかも知れません。

中学時代、私は柔道部に所属していましたが、二年生の時、体調を崩してからは練習にも行かず、ふらふらしていました。そんな時「音楽をやってみないか。」とA先生から半ば強制的に誘われ、吹奏楽部に入部してしまいました。

当時の吹奏楽部は出来たばかりで、他の部との掛け持ちが多く、いわゆる寄せ集めの部でしたが、顧問のA先生の指導は大変熱心でした。毎日、部活に来て、いい音が出なければ、出るまで我慢強く待つといった具合です。

さらに三年生になると、「純粹部員はあなただけだから」という理由で今度は部長を務めることになってしまいました。なにせ、寄せ集めの部だけに部員の心はなかなかまとまらず、正直部長として悩みました。コンクール曲は仕上がる自信もありませんでした。いよいよ夏のコンクールが迫り、A先生と出場の有無を話し合いましたが、私の答えは「NO!」。未完成の曲をブザマに演奏するのが嫌であり、惨めに思えたのです。つまり、逃げたのです。

コンクール当日、私たちは客席で他校の演奏を聴くこととなりました。案の定、他校の演奏は素晴らしく、カルチャーショックでした。しかし、それ以上に私たちの心を打ったのは小さな学校でも頑張っている生徒の姿でした。ミスだらけの演奏なのに、誰一人として嘲笑する観客はいませんでした。演奏後の大きな拍手に部員たちも感動していました。それは、バラバラ

だった部員の心が一つになった瞬間でもありました。A先生は感動することの素晴らしさを教え、「やればできる。」という自信とやる気を引き出してくれたのです。

夏休みの終盤には、秋の音楽祭に向けて、猛練習の中にも活気に満ちた部員全員の姿がありました。午後は三年生だけの勉強会、そして部活動終了後の無駄話がこれまた楽しく、充実した一日を終えるのです。この地道で単純な繰り返しの中、教師と生徒、生徒と生徒が喜びや悲しみを共にし、それぞれの絆を深め、生きる力を育てていったのではないのでしょうか。

今、学校では、「生きる力の育成」をスローガンに様々な施策が展開されています。放課後ともなれば、教員の資質向上のための研修も、家庭や地域との連携も必要でしょうし、教師にとって明日の教材研究、授業の準備も必要です。しかし、それらが子ども不在であっては何の意味もなさないことは明白です。教師は子どもと共に育つことを忘れてはなりません。

スポーツジャーナリストの二宮清純氏はスポーツ指導者にとって大事なものはMission（使命感）、Action（行動力）、Passion（情熱）だと言っています。スポーツ指導者に限らず、教師としても大事にしたい重要な要素ではないでしょうか。私は、かつて学んだA先生に思いを寄せながら、その頭文字をとって、MAPとしました。英和辞典によれば、MAPとは「地図」の他に顔、写像、あるいは「く」を計画する「く」を描く」などといった意味もあるようです。教育的にはどんな子どもに育てたいのか、そのためにどんな指導経営をするのか、しっかりと思い描き、行動することが大切です。

教師人生も残り少なくなってきましたが、これからもMAPの心を大切にし、頑張っていきたいと考えています。

過去にこんな言葉をいただきました

★子ども時代

○学校で習わないものの方がずっと多い。将来、知らないことに出くわした時にもそう言うのか。(小学生の時、テストができなかった理由を「学校で習わなかった。」と言って、父から)○できないと嘆くのは努力した人が言えること。二ヶ月頑張ってダメだったら、もう一度来なさい。(高校の時、学力不振で相談に行ったとき担任から)

★教員一年目

○あなた方は若さという能力で、何もなくても子供たちから好かれ慕われることでしょ。二十年経ったとき、何を持っていたら魅力ある教師と言ってもらえるでしょうか。(新任教員辞令交付式で上都賀教育事務所長の挨拶)

○あなたが知らなくても、地域の人はあなたのことを知っていて関心もある。校外でも、知らなくてもあいさつをしなさい。(新採着任の日、校長第一声)

○先生！子供たちが教室で待ってるよ。(子供たちにかわかれ給食室で泣いていて、調理員さんから励まされ：：)

○どんな仕事だつて苦労はあるよ。(「辞めたい」と言って、母から)

○理屈言ってないで、どうしたらできるか考えな！(先輩先生が笑顔で)

○泣いている場合じゃない。早く教室に行きなさい。(生徒指導で立ち往生して先輩先生から怒鳴られ：：)

★教員として生意気時代

○私たち教師は、数学のプロじゃなくて数学を教えるプロだ。(数学主任から)

○魅力的な授業は話術と道具。(数学の授業がべらぼうにウマイ先生から)

○学年で相談しましたか？(いい企画(のつもり)を持って行って、校長から)

★学年主任になって

○学年主任がしっかりしなくてどうする！(生徒指導の問題で教頭から)

○主任！楽しみましようよ。俺たちも。(行事を無事終わりにすることばかり考えていた私に、若い教員から)

○苦手もある。(生徒指導の場面で「苦手」と呟いた時、生徒指導主事から)

○春の来ない冬はない。(中学校暗黒の時代に、教育長から)

○筋道の通らない仕事をしてはダメだ。(教務主任から全教職員に)

★教育委員会に勤務して
○巡り合わせでここにいるんだよ。(勉強している先生がたくさんいることを忘れないようにと、教育長から)

★教頭になって

○大物教頭より名教頭になれ！(赴任にあたって上都賀教育事務所長から)

○学校の施設はぜくんどぶ教頭先生のもの！(「先生たちは準備室があつていいなあ」の愚痴に、事務長から熱い視線が：：)

★校長になって

○器が人を創るってこともある。(赴任を前に県義務教育課長から)

○嫁に来て、以来、ずっとここが好き！(大沢地区体育祭でお年寄りから)

○これまでにいただいた私の宝です。年齢とともにいただく言葉も少なくなります。何も言ってもらえなくなったら、「黄色信号」点滅です。

読書の大切さ

大学を卒業し、最初に赴任した学校は、黒羽（現在の太田原市）の中学校でした。

二年生の担任で、どう生徒と接したらよいのか、戸惑いの毎日でしたが、生徒理解の一助として先輩から勧められたのが、グループプノートの活用でした。

生活班ごとにノート一冊を渡し、毎日交代で提出させることにしました。

子どもたちは、生活のこと、学習のこと、家庭での出来事など、グループノートに自由に書いてきました。グループプノートを通して生徒の考えや行動、友人関係を理解することができ、私にとっては、大いに生徒理解に役だったように思います。

毎年、グループプノートを続けていましたが、読書好きの生徒は、読んだ本の感想を書いてくることがありました。

ある生徒がヘルマン・ヘッセの「シツダルタ」を読んだ感想を書いてきました。その本を読んでいたなかった私は、さっそく買い求め、急いで読んで、私なりの感想を書いたことがありました。また、本が好きで、本の話題が多い生徒がいて、どんな本を読み、どんな感想を書いているか、楽しみにしていました。

今、その子どもたちは、教員や会社員として活躍しています。たまに会う同窓会や年賀状のやり取りの中で本の話題になったりします。感情が豊かだったり、よく考えしつかりした意見を述べることでできた生徒たちで、読書好きが人間形成の一つの基盤になったように思います。

また、数年前に勤務した茂木町の小規模の小学校では、読書活動が盛んで子どもたちは競っ

て本を読んでいます。毎月、計画的に読み聞かせの会の方々に来ていただき、全校生対象に読み聞かせを実施していました。子どもたちは、それを楽しみにしていて、目を輝かせ熱心に耳を傾けていたことが印象に残っています。また、年度ごとに工夫をし、上級生が下級生に読み聞かせを取り入れたり、先生方も各教室で読み聞かせをしたりと、読書に親しむ環境づくりができていました。休み時間や昼休みなど、よく本を読んでいる風景を目にし、心豊かな子どもたちが育つことを念じながら、教員が協力し、育てていたように思います。

現任校では、十分間の朝の読書を実施しています。思い思いの本を準備し、始業前、静かに取り組み、落ち着いた雰囲気です。授業に臨めるようになってきています。毎日続けることで、読書を通して視野を広めるとともに、集中力も身につけ、豊かな人間性の基礎作りになると考えています。

なお、私自身と本の関係を考えてみると仕事や人間関係で行き詰まったり、人生の課題に出会ったりしたときに、本の中から、ヒントを得たこともあったように思います。本から直接理解できたこともあり、以前に読んだ本の一文が頭に残っていて、役に立ったこともありました。子どもたちには、本を通して心豊かに育ってほしいと常々思っています。そのために、学校教育の中での読書活動の役割は大きいものがあると思います。

読書活動を通して、子どもたちを育てるとともに、我々にとつても、心豊かな人間になるためには、読書が欠かせないと思います。

教員生活も残り少なくなりましたが、最近つくづく、読書の重要性を強く感じています。

担任教師の一言から…

一、教師になりたいいきさつ

話は、私の中学校時代に遡る。昭和三十年代後半、学力テストの花盛りの頃で、母校N中学校のどの先生方も、教育に燃えていた。とりわけ、数学担当のI先生は、あたかも「スパルタ教師」のように、毎時間、自作のテストを用意し、一、二分間のミニテスト（今のドリル形式の先駆け）を実践されていた。先生自ら、ストップウォッチを首に下げ、生徒には負けぬ速さで問題を解く姿、生徒一人一人に分かるまで教えてくださる本気の姿に、誰もが数学の楽しさを学んでいった。そんな中、私自身、いつしか「I先生のような、すばらしい先生になりたい」と思うようになっていた。当然、教師を目指して、普通高校を受験しようとしていたが、運悪く、中三の三学期、私の両親が共に病気になってしまった。経済的に兄に負担をかけられない状態から、止むなく就職に有利なT工業高校へ願書を提出せざるを得なかったのである。私の将来の夢・希望を察して、何とか教師の道が優位に開ける普通高校を受験させてほしいと、担任のI先生は、わざわざ私の家まで来てくださったのであった。その帰り際、I先生は、私を慰めるかのように、

「工業高校でも、本人が大学へ行く気さえあれば、努力次第で行けるのだからな…。」と、言われた。この時、その一言が、私の以後の人生を左右する言葉になろうとは想像さえもできなかった。

やがて、T工業高校三年の春、進路を決めねばならぬ時が来た。その頃になると、病弱な両親が元気を回復し、経済的にも楽になっていったようだ。自然に、一度諦めかけていた「先生に立つことになったのである。担任の一言の大事さを改めて思うのである。」

二、研究授業での苦い思い出

教職七、八年目の理科の公開研究授業でのことである。前日、夜遅くまで準備し、自信をもって臨んだ「ものの燃え方と空気」の単元で、上部が開いたペットボトルの中のように多くの火は、空気が入れかわらないため、やがて火は消えるはずだった。しかし、実験をしていたA君の班だけ消えなかった。

「火は消えませんが。もう一回、実験はやり直すべきと思います。」

早く、まとめねばと考えていた私の頭は、A君の発言でパニックとなってしまった。授業後、指導主事の先生から、講評として、「すばらしい子どもを育てていますね。」と言われたが、今も忘れられない、苦い思い出でもある。あの時、すべての子どもたちの意見を素直に取り上げることの大事さを学んだものである。

三、退職年齢に近づいて

三十年近く、「何事も全力で頑張る」ことを第一にして教員生活をしてきたが、一昨年六月、病気を経験し、改めて生命の大切さと共に「頑張りが過ぎないで、頑張る」ことの大切さを知った。教師として、時には心身共にリラックスして教育活動に励むことの大切さを、今になって思うのである。

教師を志して教職に就き、三十七年が終わる。今しみじみ思うことは、教育の大前提は「子供を大事にする」ことであり、「かわいがればかわいがる程いい子が育つ」というごく当たり前の結論である。

そのベースになっているのは、十八年間「ことばの教室」を担任し、二百人を超える、ことばや心に問題・障害をもった子供たち、いわゆる言語障害児との臨床である。子供のあるがまを受け入れ、どんな援助を必要としているのかを見極め、ただひたすらつきあうこと。喜ぶことを見つけ、せつせと相手をするのである。そんな中から、子供との信頼関係が築かれ、安心したやりとりとともに言語治療ができたように思う。また、言語障害児教育は、障害や問題そのものを取り出し治療するという「特別」な子供に対する「特別」な教育ではない。むしろ、ある問題や障害をもった子供を取り巻く周りの人たち、つまり親や家族そして教師・地域の人たちの、その子へのよりよいかかわりを追究していく営みであり、問題や障害をもちながらも、周りの人たちと明るく元気に生活ができるよう手助けをしていくことなのである。アメリカの言語学者ウエンデル・ジョンソンの次のことばは、教科書であり、基本姿勢でもある。「子供の言うことをよく聞くんです、今その子が言っていることも、今まさに言わんとしていることも、まだぜんぜん言えていないことも。その子はあなたに言いたいことがあるんです、その子にとっては意味のあることなんです、その子には大事なことなんです。ただのおしゃべり遊びだなどと思っってはいけません。―後略―」

三十四年前、言語障害児教育への誘いがあった。その時断っていたら、尊敬する三人の師に出会えなかったし、今の自分はないだろう。その時の決断に運命を感じてならない。

二年程前に亡くなられたお茶の水女子大学名誉教授、故田口恒夫先生は、長年の臨床経験からアメリカ言語障害治療学を基に、独自のいわゆる「田口理論」を構築した臨床家である。著書「言語発達の臨床Ⅱ」（光生館）の中で、育ちそびれた人間関係（乳幼児期の母子関係が基盤）を育て直し、子供が安心して依存できる人間関係を築いていくことが、ことばの発達はもちろぬ人格形成にとって重要であることを説いた。この理論は、数多くの臨床の裏付けがあり、親や教師にとって救いとなった。生前に遺言のつもりで書いたと言っておられた著書「今、赤ちゃんが危ない―母子密着の育児の崩壊―」（近代文芸社）を一読いただとよく分かる。

日本で最初にことばの教室担任をされた恩師の大熊喜代松先生には、内留で言語障害児教育の基礎を教えていただいた。中でも、「ことばの教室」は親の自己変革と親子関係の改善の手助けが重要であり、そのために「ことばを育てる親の会」の育成が不可欠であることを学んだ。著書「ママ、ボクの舌切ってよ」は、言語障害児に対する誤解や偏見をなくし、正しい理解を世に問う感動の書であり、この仕事を本気でやってみようと決断できた心に残る一冊であった。黒磯小学校元校長、磯英世先生は、「ことばの教室」のよき理解者であり、そこに通う親子を常に温かく見守って下さった。「ことばの教室」の担任として、いつも安心して、しかも思う存分仕事ができたと深く感謝したい。そして、先生の教育理念「子供を大事にする。子供の命を大切にする。」は、学校経営の基本的姿勢として、今もしっかり受け継いでいる。

十八年間に三人の師の理論・理念を実証する事例がたくさん生まれ、親子の成長が手記として文集に綴られた。その一つ一つに、障害を乗り越えた親子の力強い生き方があった。その生き方に感動し励まされ、自分も成長できたことに感謝している。

たくさんのお出合いに感謝

今から三十八年前、特殊学級担任として私の教職生活はスタートした。その当時は、特殊教育が教職員にさえ理解されていないという時代であった。私が特殊学級担任を希望したので、既に特殊学級担任を泣きながら引き受けていた先生は大変喜んでそうだ。毎年、誰が特殊学級を担任するか大騒ぎだったようで、私は、凶らずも大先輩の先生方の不安を払拭するという役目を果たしたのだった。

私が特殊教育に強い関心を持つようになったのは、次の三つの出会いがあったからだと思っている。

一つ目は、一昨年、九十四歳で亡くなった父との出会いだろう。父の影響を受けたのではないかなということだ。父は、知的障害児施設に勤めていた。そのため、子供の頃から施設で暮らす知的障害児の様子を、折に触れて父から聞く機会があり、父の言葉から、世の中には温かい助けを必要とする人たちがいることを、子供心に感じ取っていたのだろう。

二つ目は、大学のサークルでの、ある友達との出会いだ。その友達は養護学校教員養成課程に籍を置いていた。その友達のある言葉が、私の心をとらえたのだった。「一生懸命に教えれば教えた分、成果が現れる教育があれば、同じことを繰り返し繰り返し、手を替え品を替え工夫を重ね何度も教えても、すぐには結果が見えない息の長い教育もある。世の中に、強い者と弱い者がいたとしたら、私は迷わず弱い者の味方につきたい。少しの可能性や変化を喜べる教師になりたい。」この言葉がきっかけで、知的障害児教育も学ぶことになった。

三つ目は、知的障害児教育の担当の教授・助教授との出会いだ。日本の特殊教育の草分けと言われていたお二人の立派な先生の講義を受けることができた。先生の口から出る一つ一つの言葉、先生のからだ全体からにじみ出る豊かな人間性に引かれて、自分が将来どんな教師になりたいのかが、少しずつ見えてきたような気がしたのだった。

様々な出会いの中でたくさんのお出合いを学び、出会いで人生が変わることもある。今、しみじみそう思っている。そして、七年間の特殊学級担任の経験は、その後の私の学級経営や学校経営の原点となったのだった。

肢体不自由のY児と知的障害のK児が在籍する一年生を担当したことがあった。今なら市費負担の補助員が付くだろう。その当時は、これも一つの出会いと考えて担任が頑張るしかなかった。私も弱音を吐かずにこの二人を学級経営の中心に据えて頑張った。今年のお正月にこのクラスの同級会に招かれた。礼儀正しい成人になっていた。花束贈呈があった。花束を持って出てきたのは何と立派に成長したY児とK児だった。言葉では言い尽くせぬ感動を覚えた。

勉強ができてもできなくても、運動が得意でも不得意でも、精一杯頑張る子供たち一人一人を大切にすることを信念としてやってきたことは、間違っていないかった。幼くても子供たちは分かってくれていたのだ。弱い者の立場を考えることの大切さを。この子供たちと出会って本当に良かった。

間もなく三十八年間の教職生活に終止符を打とうとしている自分をふり返り、今まで私を支えてくれたたくさんのお出合いに感謝している。

○入選になるもならぬも教室に貼られし子らの絵は明るかり

(※特別支援教育関係の用語については当時のものを使用しています。)